

声となって語りかける聖書

— ニュッサのグレゴリオスの『キリスト教綱要』
(*De Instituto Christiano*) における聖書引用 —

土 井 健 司

はじめに

礼拝の中で聖書朗読を聴くとき、聴きつつも持参した聖書の頁をめくって目で追っていることがほとんどではないだろうか。文書の文字を目で追って読む場合、その言葉は書かれた文字として読まれ、誰かの生きた言葉として経験されることがない。そもそもわたしたちの時代・社会では、たとえば書類に書かれた文字としての言葉、デジタル化された言葉が優勢であって、その場で消えゆく音声として語られる言葉の重要度は希薄になりつつある。聖書の世界は過去のことであって、そこに記されていることも過去の言葉ではある。しかし、その言葉が生きた言葉として語られるという点に福音伝道の意義があるはずである。こうした問題意識から4世紀のニュッサのグレゴリオスの思想を研究し、とくに「声」としての聖書理解について考えてきた。

本論考において、ニュッサのグレゴリオスの *De Instituto Christiano* (以下 *DIC* と略記)⁽¹⁾ における聖書引用の仕方を一つひとつ詳細に考察し、聖書の言葉の何かしらの働き、そのアクチュアリティをグレゴリオスがどのように捉えていたのかを明らかにしたい。数多くのグレゴリオスの著作の中から本論考において *DIC* を取り上げる理由は、後述するように⁽²⁾、この著作においてグレゴリオスはとりわけ積極的に聖句を引用し、自身の論述の信頼性を高めようとするからである。この著作はこれまでシュネルギスム、協働主義という神学的主題の観点から興味をもたれてきたが、ここではこの主題には触れず、もっぱら聖書の引用法に焦点を絞って考察していきたい。グレゴリ

オスがどのような仕方で聖書を引用するのか、そこに注目して研究をまとめていきたい。

1. 偽マカリオス「大書簡」と *DIC*

グレゴリオスの著作として *DIC* を研究するに際して、まず確認しておくべきことがある。それはこの著作の真筆性に関わることであり、*DIC* を取り上げる以上、これに触れずにおくことができないからである。とは言えこの確認すべき事柄をここで本格的に論ずることは控えたい。参照すべき論文もすべて読み切ったわけでもなく、何より本論考の目的から大きく外れるからである。

DIC はミーニュ教父著作集所収のグレゴリオスの著作のなかにも入れられているが⁽³⁾、Gregorii Nysseni Opera、すなわちブリル社から刊行されている全集版所収のテキストを校訂したのは碩学 W・イエーガーであり、彼はかなり力を入れ年月を費やしてこの校訂版を作成した⁽⁴⁾。そもそも問題は、そのミーニュ版テキストが、エジプトの隠修士マカリオスの名を冠した大書簡(第二書簡)⁽⁵⁾とそっくりであったことに起因する。以下このあたりの事情をイエーガーに従って説明していこう⁽⁶⁾。

まず 1910 年にイエズス会のスティグルマイヤー師 (J. Stiglmayr, S. J.) がある論考において、「マカリオス大書簡」の第二部が、(ミーニュ版の) *DIC* の多くの部分と類似していることを指摘した。ただここで言及される「マカリオス」がエジプトの隠修士のマカリオスである可能性はなく、そもそもこの書簡は偽書であるという。そこでスティグルマイヤーは両者の類似については *DIC* の先行性を主張し、「マカリオス第二書簡」の著者が *DIC* を写したと結論した。これと逆の結論を導き出したのが、その 10 年後に論文を発表したベルギー人のベネディクト派修道士ヴィルクール (Dom L. Villecourt) であった。「大書簡」は第一部において情念と目標としてのアパティアが論じられ、第二部において修道生活上の様々な問題が論じられる。そして(ミーニュ版の) *DIC* においては第一部で哲学的生活の目標が論じられ、第二部が

「大書簡」の第二部と類似するところになる。ただし類似するとしても「大書簡」の中には共通しない独自の議論も掲載されており、この部分について *DIC* を先行すると見たスティグルマイヤーは「大書簡」が議論を拡張したとし、反対にヴィルクルは先行する「大書簡」の記述を *DIC* が省略したとした。つまりヴィルクルによると *DIC* は「大書簡」の省略版だという。ただし「大書簡」の第一部と第二部とは内容上つながりが悪い。そこでヴィルクルは目下の「大書簡」のテキストの第一部はオリジナルのものではなく、省略されたものであるとした。また「大書簡」がマカリオスのものでないとしたが、もしそうなら、年代的に見てその複写版であるという *DIC* はニュッサのグレゴリオスの真筆ではないことになってしまう。

以上の結論についてイエーガーは（ミーニュ版の）*DIC* の第二部が「大書簡」の抜粋であることを認めつつも、その神学思想や文体といった内的証左に照らした考察がない点を不十分としつつ、写本調査を通してミーニュ版 *DIC* は確かに抜粋ではあるが、それは「大書簡」からの抜粋ではなく、*DIC* の原本からの抜粋であるとした⁽⁷⁾。つまりミーニュ版 *DIC* は後代のビザンツ時代の抜粋であり、他の写本を競合してテキストを構成するなら本来の *DIC* は一層長い文書であることが判明したという。その成果が全集版に所収のテキストになる。この原本からミーニュ版の抜粋が作られ、また「大書簡」もこのグレゴリオスの原本から抜き書きを通して作成されたという。イエーガーの結論に照らせば、「大書簡」が後代のものとなり、先行してグレゴリオスの *DIC* 原本が作成されたことになる。さらにイエーガーは他のグレゴリオスの著作との比較から *DIC* が最晩年のものであると論じ、その修道思想の集大成となる著作であると結論付けた。

イエーガーの研究によってこの問題は解決したかに見えたが、しかしとくにある観点から異議が提示されることになった。実は *DIC* には多数の聖書引用があり、ここでグレゴリオスはかなりの聖書箇所を抜き書きしている。問題の発端は、以下に述べるクリジンの論文における「大書簡」に引用されている聖書本文がトマス福音書・ディアテッサロン系聖書と関連があるとの指摘であった。これを受けて、グレゴリオスの *DIC* に引用されている聖書

本文と「大書簡」とを比較した論文をクリジン（A. F. J. Klijn）が発表し⁽⁸⁾、その翌年にベーカー（D. A. Baker）がさらに詳細に比較検討を行った⁽⁹⁾。いずれの結論も「大書簡」の聖書本文がグレゴリオスの *DIC*（もちろんこの *DIC* はイエーガーの校訂版が用いられている）を写したものではないということであった。こうして *DIC* と「大書簡」のいずれが先行するのかは、聖書本文の引用という論点から、振り出しに戻った印象がある。このためニュッサのグレゴリオスの聖書引用を詳細に扱った研究書においてブロックス⁽¹⁰⁾ は、オックスフォード大学に提出した学位論文の中では研究対象として *DIC* を入れていたが、これを除いたという⁽¹¹⁾。ちなみにブロックスの研究によるとグレゴリオスの用いていた聖書はビザンツ系写本と一致するという。

イエーガーの業績によって *DIC* の原本とも言うべきテキストが確定したのであるが、しかし「大書簡」との関係を考えるなら、未だ *DIC* がグレゴリオスの真筆の著作かどうかは問題点が残ることが分かる。他日を期してこの問題は考察する必要があるだろうが、今はこれを確認するだけに止めておきたい。本論考ではイエーガー説をもとに全集版に収められている *DIC* を真筆として捉え、また最晩年の著作として扱っていききたい。

2. 語り出される声と書き記される文字

グレゴリオスにとって「聖書」が書かれた文字による文書であったのか、それとも別の何か語られる言葉の集成であったのか、このような無意識のレベルに関わる事柄を探り出すのは容易ではない。以前この問題のため『モーセの生涯』のある箇所を考察したことがあるが⁽¹²⁾、聖書を指して「神の声」と述べる箇所もあるものの、すべて聖書を指す時に「神の声」と記すわけではない。これまでの研究によれば「神の声」とは総じて聖書を指すものとして使われているが、しかし決して逆は成り立たないのである。聖書を指す際のこうした表現の幅、曖昧さはどのように理解すべきであろうか。そもそもグレゴリオスにとって文字の刻まれた文書と口頭での音声との違いはどのように考えられていたのであろうか。

グレゴリオスは *DIC* の序に当たる部分 (40, 1-43, 7) で執筆の目的を記している。冒頭、人が情念や身体的なものから離れてひたすら魂を見つめるなら、創造した神の愛やその意図が知られ、可知的で至福なる御像への愛が自らの本性と結ばれるようになる。こうして真理の認識はわれわれの救いのための薬となり、救世主の恩恵によって与えられるなら、人は真理を知り、救われるようになる。このように救済の目標を描き、続いてグレゴリオスはこうした認識を得た人びと、修道者たちに向けて「あなた方」と語りかけつつ、「あなた方」はグレゴリオスに向かって指導者として日々の生のための道を示すように求めたという。すなわちその目標、神の意思、その道、修道者同士の関係、哲学の道、引き受けねばならない苦難についてである。しかも、続いて述べられるのは、「あなた方」はこれらについてのグレゴリオスの考え・言葉 (τὸν λόγον) が「単に口頭からではなく、文字によって刻印される」(οὐχ ἀπλῶς ἀπὸ στόματος ἀλλὰ γράμμασι τυπωθέντα) ように懇願したという。こうして保持することで、必要に応じて取り出せるようになるという。これが書物としての執筆の動機と想定される。しかしながらグレゴリオスは、こう記した直後に「目下の願いに際して聖霊によってわれわれに備えられる恩恵に従って語ることを試みよう (πειρασόμεθα εἰπεῖν)」と記して「語る」(εἰπεῖν) と述べる。ここは「書く」とか「記す」ではなく、「語る」というのである。しかしその少し後には「あなた方にたいして教えの小さい種のようなものを書く (γράφομεν)」という。一体「語る」のか「書く」のかいずれであるのかを問いたいところであるが、そもそもこの二者択一的前提から離れるなら、むしろ両者の区別の必要がなかったと解すべきであろう。書いたとしても結局それは声を出して読まれることを前提にしていたはずである。つまり文字や書かれた文書に言及される場合でも、決して文字だけと理解していたのではなく、声との連続性、すなわち修道者たちの前で読み上げられることを当然のこととしていたのであろう⁽¹³⁾。黙読ではなく、当時の音読の習慣を考慮するならますます声の方に傾いて捉えられていたと言えよう。

これを証すかのように序に続く第一部の冒頭でグレゴリオスは「聖書のす

べてを通して聖なる人びとの声が叫び求めている敬虔なる信仰」と述べている。ここで「聖書のすべて」とは(πάσης γραφῆς)であり、これら書かれたもののすべてにおいて「聖なる人びとの声」(αἱ τῶν ἁγίων φωναί)が叫び求めている(βοῶσι)の「敬虔なる信仰」(τὴν εὐσεβῆ πίστιν)であるという。ここでは「(聖なる)文書」と「声」とが躊躇なしに並置して記されている。書かれた文字が話される生きた声に連続しているからこそこのように並置できる。ここでいう「声」が比喩以上のものであることを含めて本節で論じたことは、次節において聖書の引用法を確認することで一層確認されることになる。

3. DIC における聖書の引用法

DIC は序文と第一部、第二部から成っている。第一部(43, 8-66, 8)では人間としてあるべき生の目標が論じられ、第二部(66, 9-89, 12)では修道者たちの共同生活について議論が進められる。論述に際してグレゴリオスは、述べられたことが信頼されるために「聖書に記されている言葉」(τὰ τῆς γραφῆς ῥήματα)を引用しようという。以降グレゴリオスは、特に第一部においては、聖書を頻繁に引用して論述を進めていく。グレゴリオス自身の思想を展開するというよりも、むしろ聖書の抜粋集のような様相すらある。一つ極端な例ではあるが、テキスト 58 頁は 26 行から成っているが引用部分は 19 行あり(73%)、59 頁では 28 行中、引用部分は 19 行となっている(67%)。これら両頁は極端な箇所ではあるが、それでもいかに聖書引用を重用しているのかが推し量られる。このような特徴をもっているため、その聖書引用が研究対象とされることも頷けよう。そこで以下、具体的に引用の次第を確認していきたいが、筆者が数えたところでは全体で 32 箇所あり、そのほとんどで複数箇所の引用がなされている(64 頁以下の表を参照)。なお「聖書」については、ἡ γραφή との表現の他、一箇所 τῷ ἁγίῳ という言葉も確認できる(56, 14)。

まずは具体的に引用箇所を確認するために、最初のを挙げてみる(表の番号 1)。

霊の力は浄化するものであり、丁度次のように言われている。「あなた方に向けられた私たちの福音は言葉においてのみ生じたのではなく、力と聖なる霊と確信のうちに生じたということはあなた方もご存じの通りです」。さらにまた「あなた方の完全なる霊と魂、身体とが私たちの主イエス・キリストの名において非の打ちどころのない仕方で維持される」と。主は洗礼を通してふさわしい人びとに不死の質を与えられた。その結果各自にゆだねられたタラントンはゆだねられた者どもの働きによって見えざる宝を生み出すのである⁽¹⁴⁾。

この箇所には二つの引用文が認められるが、ひとつは第一テサロニケ 1 章 5 節、もうひとつは第一テサロニケ 5 章 23 節となり、それぞれ鍵カッコで示した。二つ目の引用文に続いて「主は……」と訳出したものは関係代名詞の ὅ が使われており、文としては連続している。こうした聖句の引用法ということで筆者が注目したいのは、これらを引用するときの導入句であり、今の場合は「丁度次のように言われている」という部分に当たる。また今の事例には欠けているが、聖句を引用した後に続く句あるいは文があり、稀ではあるが当該聖句が何らかの働きをすると言及する箇所がある。本論考ではこれら両者に注目していきたい。グレゴリオスの引用法は、形式的に見れば、次のような構造となる。

導入句→聖句 1→等位接続詞 (καί ; καὶ πάλιν)→聖句 2→後接句

上記は DIC における聖句引用に際しての基本形となるが、もちろんすべての引用がこの形式を踏んでいるわけではなく、導入句や後接句が欠けているケースや聖句が一つの場合も多々あり、バリエーションは複数存在する⁽¹⁵⁾。また上記において確認できるが、最後の一文は聖句の引用ではないものの、福音書におけるタラントンの譬えを暗示したものとなっている。このような暗示箇所としては、他にマタイ福音書 7 章 14 節の暗示となっている「細い道を歩む」(τὴν τεθλιμμένην ὁδὸν βαδίζων) という箇所もある (68, 9)。これらはギリシア語として見ればほぼ引用と言えなくもなく、判断の難しいところではある。しかし、その意味でも導入句や後接句があれば、明確

に引用として記されているといえる。

まずは導入句、後接句において何らかの動詞が用いられているテキストを確認してみたい。以前グレゴリオスにおける「神の声」(テイア・フォーネー)の全 53 用例の用法を研究したおりに、この概念が主語となって何らかの働きをなすものと記されているテキストの存在を確認した⁽¹⁶⁾。グレゴリオスにおいて「神の声」はすべて聖書(聖句)のことを指すが、聖書(聖句)が何らかの動詞を伴い、それも現在時制を使って働きをなすという。その際に使われていた動詞は、「語る」(φησί)、「述べる」(λέγει)、「答える」(ἀποκρίνεται)、「証する」(ἀληθεύει)、「約束する」(ἐπαγγέλλεται)、「教える」(διδάσκει)、「与える」(δίδωσι)、「名づける」(ὀνομάζει)、「証明する」(μαρτυρεῖται)、以上九つの動詞について 17 例が現在時制(三人称単数形)で用いられ、他は現在完了形で 2 例、アオリストで 4 例、そして分詞形が 2 例、以上が確認された。ほとんどの場合現在時制で用いられており、「基本的に「神の声」は現在に鳴り響き、力強く働くものと捉えられている」との結論を得た⁽¹⁷⁾。では「神の声」が何かを働くのであれば、「神の声」= 聖書(聖句)であれば、聖書(聖句)も何かの働きをなすものと捉えられているのではないだろうか。こうした点からテキストを読むと、いくつかの箇所ではグレゴリオスは導入句や後接句において動詞を用いて表現していることに気づく。つまり引用に先立って、あるいは引用した直後にこれらの聖書(聖句)の言葉が一定の働きをなすものと捉えられているのである。では、聖書(聖句)が具体的にどのような動詞を伴って働くのか、使われている動詞を文脈上の語形のままで列挙してみよう。「命ずる」(ἐγκελεύεται)、「呼びかける」(παρακαλεῖ)、「語る」(φησί)、「祝福して言う」(μακαρίζει λέγων)、「命ずる」(παραγγέλλει)、「呼びかけて言う」(παρακαλεῖ λέγων)、「教える」(διδάσκει)、「命ずる」(κελεύει)、「答える」(ἀποκρίνεται)、「是認して言う」(ὕπογράφει λέγων)、「憎んで嫌悪する」(μισεῖ καὶ βδελύττεται)、「奪う」(ἀποστερεῖ)、「数える」(ἐγκαταλέγει)、「名づける」(ὀνομάζει)、「叫んで言う」(βοᾷ λέγων)、「約束して言う」(ἀπειλεῖ λέγων)、「祈る」(ἐπεύχεται)、「述べる」(εἶπεν)、「意図する」(βούλεται)、「述べてきた」(εἶρηκεν)、以上となる。これらが導

入句、後接句において用いられて聖書（聖句）が引用されている。これらを見てみると「神の声」の時に用いられていた動詞と重なるものもあるが、何よりもすべてにおいて動詞が現在時制で用いられていることが確認される。たとえば次のような箇所がある（表の番号6）。

このような人びとを主は祝福して「心において清い者は幸いである。このような人びとは神を見るであろう」（Mt. 5, 8）とおっしゃっている。さらに別のところでは「あなた方の天の父が完全であるように、あなた方も完全となりなさい」（Mt. 5, 48）と命じておられる。このような完全性を使徒は呼びかけて、走るように言っている。「私もそのために苦闘し骨を折っている、キリストにおける完全をすべての人に与えるため」（Col. 1, 28f）。またダビデは霊によって語りつつ、正しく哲学しようと志す人びとに真の哲学の道を教えているが、その道を通して完全なる目標を目指し、歩まねばならないのであって、[必要なものを]与えてくださる方に哀願するのであるが、それはダビデを通して以下のように御霊が教えてくれている。すなわち「私の心があなたの義において非の打ちどころのないものとなりますように」（Ps. 118, 80⁽¹⁸⁾）と語っており、恥ずべき者となることはない⁽¹⁹⁾。

実はまだ聖書の引用は続き、ダビデについて詩編 50 編 12 節、23 編 4 節が引かれるのだが、ここで止めておきたい。確認されるようにグレゴリオスは、引用しつつ「祝福しておっしゃっている」「命じておられる」「呼びかけて、走るように言っている」「霊によって語りつつ」「語っている」と現在時制を用いつつ記している。「神の声」が何かを働くことに対してここでは、引用されている聖書言葉を述べた「主」「パウロ」「ダビデ」が今、語りかけているようにその内容を記している。もう一つ、引用して確認しておきたい（表の番号12）。

主ご自身は叫びつつ何をおっしゃっているのか。「人びとの間で尊ばれるものは神においては嫌悪すべきものである」（Lk. 16, 15）、また「自らを高め

るものは貶められ、自らを貶めるものは高められる」(Lk. 14, 11)。さらに知恵は「すべて高ぶった心は主においては汚れたものである」(Prov. 16, 5)と語る。魂の内側に隠れている情念への告発に向かったところは多く、他の聖書においても見出すことができよう。……丁度、ダビデの声を使って御霊ご自身が「私の隠れたるもの(=罪)から私を清め、あなたの僕を異質なものから引き離してください」(Ps. 18, 13f)と「祈るように] 教えてくださっている」⁽²⁰⁾。

ここではマタイ福音書の山上の説教の一節を引用しつつ、主イエスが「叫びつつおっしゃっている」と記し、箴言を引用しつつ「知恵」が「語る」のであり、詩編を引用しつつダビデの声を使って御霊が「教えてくださっている」という。ここでも動詞は現在時制となるが、とくに「叫ぶ」(βοᾶ)というのは福音書に照らしてその時イエスが叫んだというのではない。むしろ内容に照らして今重要なこととグレゴリオスが判断して、イエスがあなた方に向けて叫んでいる、というのが興味深い。

いま見たように、実はこれらの動詞は聖書(聖句)を主語とするものではなく、主体は別に述べられている。「神の声」の研究においては、まさにこの概念が主語となって動詞と結びついていたが、ここではそうではない。動詞の主語となるものは別に示されている。今の引用箇所では「主」であり、また「知恵」であり、そして「ダビデの声を使って御霊」がそれぞれの働きをなしている。DICにおける聖書の引用箇所すべてにおいてこのように主体が示されているわけではなく、詳細は別紙資料に譲るが、当該箇所で提示されている主体・主語となっているものを次に列挙してみよう。資料の順番に従い、また重複を避けるため形容詞は除いて挙げてみると以下ようになる。

「主の声」(τοῦ κυρίου φωνήν)、「使徒」(ὁ ἀπόστολος)、「主」(ὁ κύριος)、「ダビデ」(Δαβίδ)、「使徒ヨハネ」(τοῦ ἀποστόλου Ἰωάννου)、「知恵」(ἡ Σοφία)、「モーセ」(ὁ Μωυσῆς)、「救い主」(ὁ σωτήρ)、「パウロ」(Παῦλος)、以上となる。なお「使徒」とのみ記されている場合は「パウロ」のことを指す。

これらが主体となって「命じ」「呼びかけ」「語り」「叫んで言う」のである。すなわち *DIC* において聖書（聖句）引用は、何者かの働きとしてその言葉が引かれているのである。そしてその働きは、現在時制が使用されており⁽²¹⁾、今その働きかけが聴く者たちに向かっていることを示している。

また主体となるのは、福音書であればイエス、パウロ書簡であればパウロ、詩編であればダビデとなるのが普通であるが、必ずしもそうでない場合もある。第二部のなかにある 79 頁 5 行目からの箇所には、続きで第二コリント書 1 章 4 節、詩編 83 編 3 節、同 62 編 6 節が引かれているが、これらの言葉はそれぞれ「使徒」や「ダビデ」が語るとはせずに、次のように記している（表の番号 28）。

御霊の活動を通して私たちの苦難の一切において、主は救いに向けて私たちに呼びかけており、そして私たちに諸々の賜物を分配されるのである⁽²²⁾。

原文ではこれに続いて第二コリント書 1 章 4 節が引用されており、そこでは「使徒」には一切言及がない。その意味では誰が語ろうと、聖書の言葉の一切はすべて神、イエス、御霊に帰され则认为られているのであろう。その意味ではそれぞれの動詞において表現されている働きは神的働きに帰一すると言えよう。

神、主イエス、御霊、パウロ、ダビデなど聖書に登場する人物等が主体となって語りかける。ただ「言う」という場合もあるが、それだけでなく「命ずる」「呼びかける」「祝福する」「呼びかける」「教える」「命ずる」「答える」「名づける」「叫ぶ」「約束する」等などの働きをする。これらの働きのうち大半が聴く者に向かった働きであり、当時力強くそれら言葉が朗読され、聴く者の耳をとおして心に響いたのであろう。そしてこれらの言葉が聴く者に向かうのは、語る者がいるからであり、誰かが語りかけているというその現在性の意識がつよく印象づけられたものと思われる⁽²³⁾。この現在性は「生ける神」という聖書的伝統に立つものであろうが、最後にひとつ興味深いテキストに触れておきたい。*DIC* 第二部の終わり近くで祈りというものの重要

性が説かれるところがある。そこでグレゴリオスは「哀願する者たち向かって、語られたことに従ってどのように祈るべきかを主ご自身も与えてくださるであろう」と述べている (81, 10f)。ここでは現在形ではなく、「与えてくださるであろう」(δῶσει) と未来時制が使われている。もちろんその内容は未定であり、そのためこの箇所には聖書の引用はない。むしろ将来において求めるならば主イエスが教えてくれるというのであり、その背景にはイエスは現在も生きて働きかけているという現在性が前提となっている。この点を考慮するならば、聖書の言葉は生きた言葉として将来に向けて語りかけてくるものなのである。

むすび

本論考においてニュッサのグレゴリオスの *DIC* における聖書の引用の仕方を調べ、聖書の言葉がどのようなリアリティーをもっていたのかを考察してきた。この著作において聖書が引用される時に導入句や後接句が置かれ、それらのなかで主イエスやパウロが語り、命じ、呼びかけ、叫ぶものとして聖書の言葉が引かれる。これらの動詞は、すべて現在時制が使われ、今まさにそのように働くものとして聖書が引用される。聖書の言葉は朗読されるときに、文字どおりそうした語り、命令、叫びとして経験されたのであろうと推察される。また「声」としての言葉には、必ずその声の主、話している誰かが意識される。声はきわめて人格的、あるいは個人的なものであって、その現存を意識させる⁽²⁴⁾、力強い言葉なのである。その意味で第一部冒頭に記されていた「聖書のすべてを通して聖なる人びとの声が叫び求めている」という表現は、*DIC* におけるグレゴリオスの聖書観を表現していると言えよう。聖書はすべて語り出される声であり、その声の主へと語りかけられる私たちを力強く結びつけるものなのである。こうした言葉の現在性、力というものを理解することは現代社会では難しくなっているところがある。言葉が形骸化し、虚しく響くものと経験されることも多々あろう。しかし言葉は誰かによって語られるものなのであり、現代においては声としての言葉のリア

リティーに立ち返る必要があるように思われる。

註

- (1) *De Instituto Christiano* はミーニュ教父著作集に所収のテキストのヘッダーに記載されているが、テキストの冒頭に記されているタイトルは *De Proposito Secundum Deum* とある。これはギリシア語表題の Περὶ τοῦ κατὰ θεὸν σκοποῦ に対応する。*De Instituto Christiano* は『キリスト教手引き』といった意味となる。GNO 所収のテキスト(脚註3を参照)には次のように二つ記されている。Γρεγορίου Ἐπισκοποῦ Νύσσης Περὶ τοῦ κατὰ θεὸν σκοποῦ καὶ τῆς κατὰ ἀληθειᾶν ἀσκήσεως とある。つまり二部構成となっていて、最初に神的な目標について、続いて真の修道的生が語られることになる。いずれであれ、ここでは適訳を見いだすことができず、ラテン語タイトルの頭文字を並べて DIC と略記して論述を進めていきたい。
- (2) 第3節冒頭を参照。
- (3) PG46, 288A-306C. なお邦訳として、谷隆一郎訳「キリスト者の生のかたち」(谷隆一郎編訳『キリスト者の生のかたち——東方教父の古典に学ぶ——』知泉書館、2014年[9-55頁])がある。しかしここに記されている訳文は、全集版のテキストの訳としては、時に丸々1頁分がないなど抜けているところが多く(例えば22頁「キリストの花嫁」のところでは、GNO 8.1, p. 50, 9-p. 51, 10の部分が訳されていない)、しかしミーニュ版の翻訳としてはやや分量が多く(たとえば冒頭部分は全集版テキストの訳出となっている)、底本が不明となっている。
- (4) GNO 8.1, Leiden; Brill, 1952, p. 1-89. なお写本等の校訂について説明した序が3頁から39頁まで、本文が40頁以降となっている。なお英訳は次のものがあり、ここで参照している。V. W. Callahan tr., *Saint Gregory of Nyssa Ascetical Works*, The Fathers of the Church 58, Washington D. C.; Catholic U. P., pp. 125-158.
- (5) PG36, 410C-441A.
- (6) W. Jaeger, *Two Rediscovered Works of Ancient Christian Literature: Gregory of Nyssa and Macarius*. Leiden; Brill, 1954. とくに第三章「ニュッサのグレゴリオスのDICの真正性と所謂マカリオス「大書簡」」の論述に拠ってまとめていく。
- (7) ここでイエーガーは同系統のA写本とS写本、L写本、そしてZ写本、そして別系統のM写本の四つを基本として校訂作業を行っている。彼は、こうした写本の研究をしていれば、ミーニュ版のような過ちに直ちに気づいていたであろう(*errorem statim cognovisset*) と述べている(GNO 8.1, Praefatio, p. 3)。
- (8) A. F. J. Klijn, Some remarks on the quotations of the gospels in Gregory of Nyssa's "De Instituto Christiano" and Macarius' "Epistula Magna", *VC*19, 1965, pp. 164-168.

- (9) D. A. Baker, Pseudo-Macarius and Gregory of Nyssa, *VC20*, 1966, pp. 227-234. なおこのペーカー論文の脚註2にはイエーガー説に対する J. Gribomont (Le 'De Instituto Christiano' et le Messalianisme de Gregoire de Nysse, *Studia Patristica* V, 1962, p. 312-322) や R. Staats (Der Traktat Gregors von Nyssa 'De Instituto Christiano' und der Grosse Brief Symeons, *Studia Theologica* 17, 1963, S. 120-128) による反論が紹介されているが、筆者は未見にとどまる。
- (10) J. A. Brooks, *The New Testament Text of Gregory of Nyssa*, Atlanta, Georgia; Scholars Press, 1991.
- (11) Brooks, *op. cit.*, p. 4, n. 1.
- (12) 拙論「ニュッサのグレゴリオス『モーセの生涯』における φωνή の思想」『神學研究』第7号、関西学院大学神学研究会、2024年、31-48頁、とくに32頁を参照。
- (13) 無文字社会に対して文字をもつ社会では生活の諸相が一変すると考えられがちであるが、実は両者の相互作用や混合は可能だという。文字をもつことで社会が一挙にすべて文字化されるわけではなく、過渡期あるいは混合状態というものがある。こうした二者択一ではない文字と声の関係の諸相について、筆者にとって示唆的なものとして次の文献を挙げておきたい。出口顕『声と文字の人類学』NHK ブックス 1284、2024年。
- (14) 44, 6-14:
 ἡ τοῦ πνεύματος αὕτη καθαίρει δύναμις κατὰ τὴν εἰπόντα "Οτι τὸ εὐαγγέλιον ἡμῶν τὸ πρὸς ὑμᾶς οὐκ ἐγενήθη ἐν λόγῳ μόνῳ, ἀλλὰ καὶ ἐν δυνάμει καὶ πνεύματι ἀγίῳ καὶ ἐν πληροφορίᾳ πολλῇ καθὼς οἶδατε, καὶ πάλιν Ὁλόκληρον ὑμῶν τὸ πνεῦμα καὶ ἡ ψυχὴ καὶ τὸ σῶμα ἀμέμπτως ὃς παρέσχε διὰ τοῦ λουτροῦ τοῖς ἀξίοις τὸ τῆς ἀθανασίας ἐνέχυρον, ὅπως τὸ πιστευθὲν ἐκάστῳ τάλαντον τῇ τῶν πιστευθέντων ἐργασίᾳ τὸν ἀόρατον κομίσῃ πλοῦτον.
- (15) 例えば以下のようなシンプルなものもある (65, 11f)。「使徒に従って前へと身を伸ばし」(Phip. 3, 13: ἐπὶ δὲ τὸ ἔμπροσθεν κατὰ τὸν ἀπόστολον ἐπεκτείνεσθαι)。もし「使徒に従って」がなければ引用かどうかは微妙な箇所ではあるが、「使徒」に言及する以上、引用と見なすことができる。
- (16) 拙論「ニュッサのグレゴリオスにおける「神の声」の用例と用法」『神學研究』第68号、関西学院大学神学研究会、2021年、29-40頁、とくに35頁以下を参照。
- (17) 前掲論文 36頁。
- (18) 詩編の番号は現行聖書でなく、『七十人訳』の数字を示している。
- (19) 48, 5-17:
 τοὺς τοιούτους καὶ ὁ κύριος μακαρίζει λέγων· Μακάριοι οἱ καθαροὶ τῇ καρδίᾳ ὅτι αὐτοὶ τὸν θεὸν ὁφονται· καὶ ἐν ἄλλοις παραγγέλλει· Γίνεσθε οὖν ὑμεῖς τέλειοι ὡς ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος τέλειος ἐστίν· ἐπὶ ταύτην τὴν τελειότητα καὶ ὁ ἀπόστολος

παρακαλεῖ τρέχειν λέγων· ἵνα παραστήσω πάντα ἄνθρωπον τέλειον ἐν Χριστῷ εἰς ὃ καὶ κοπιῶ ἀγωνιζόμενος· καὶ ὁ Δαβὶδ πνεύματι λαλῶν διδάσκει τοὺς ὀρθῶς φιλοσοφεῖν θέλοντας τὴν ἀληθινῆς φιλοσοφίας ὁδόν, δι' ἧς χρὴ βαδίζειν πρὸς τὸν τέλειον σκοπόν, αἰτοῦντας παρὰ τοῦ διδόντος ἅπερ διὰ τοῦ Δαβὶδ τὸ πνεῦμα διδάσκει· Γενηθῆτω, φησὶν, ἡ καρδία μου ἄμωμος ἐν τοῖς δικαιομασίῃ σου, ὅπως ἂν μὴ αἰσχυρθῶ.

(20) 54, 5-19:

τί δὲ αὐτὸς ὁ κύριος βοᾷ λέγων· Τὸ ὑψηλὸν παρὰ ἀνθρώποις βδέλυγμα παρὰ τῷ θεῷ ἐστίν, καὶ ὁ ὕψων ἑαυτὸν ταπεινωθήσεται καὶ ὁ ταπεινὸν ἑαυτὸν ὑψωθήσεται· καὶ ἡ Σοφία φησὶν Ἀκάθαρτος παρὰ κυρίῳ πᾶς ὑψηλοκαρδίας· πολλὰ δὲ καὶ ἐν ταῖς ἄλλαις γραφαῖς εὗροι τις ἂν εἰς κατηγορίαν τῶν ταῖς ψυχαῖς ἐγκρυσπτομένων παθῶν, (中略) ὡς αὐτὸ διδάσκει τὸ πνεῦμα τῇ τοῦ Δαβὶδ φωνῇ χρώμενον· Ἐκ τῶν κρυφίων μου καθαρίσον με καὶ ἀπὸ ἄλλοτρίων φέισαι τοῦ δούλου σου.

(21) 50, 6 に ἤκουσα とアオリスト形があるが(表の番号8)、文脈上、また英訳でも I hear とされていて、過去のことと解釈すべきものかどうか躊躇する。なおたとえ引用後に聖句を説明してアオリストを用いる場合は見られる。たとえば 51, 8 には ἐκάλησεν が使われている(表の番号9)。

(22) 79, 5-8:

παρακαλεῖ οὖν ἡμᾶς ὁ κύριος διὰ τῆς ἐνεργείας τοῦ πνεύματος ἐπὶ πάσῃ τῇ θλίψει ἡμῶν εἰς τὸ σῶσαι καὶ μεταδοῦναι τῶν πνευματικῶν ἀγαθῶν καὶ τῶν ἑαυτοῦ χαρισμάτων·

(23) 『雅歌講話』における有名な「現存の感覚」は、従来は神秘主義的な仕方で解釈されてきているが、この声の経験として解釈される可能性について論じたことがある。拙論「ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』における「声」の神学」『基督教学研究』第42号、23-67頁、特に38頁を参照。

(24) W. J. Ong, S. J., *The Presence of the Word*, New Haven and London: Yale U. P., 1967, p. 113. ここでオングは次のように記している。“Moreover, since sound is indicative here-and-now activity, the word as sound establishes here-and-now personal presence. Abraham knew God's presence when he heard his “voice.””

○ニュッサのグレゴリオス De Instituto Christiano における聖書引用の事例

番号	GNO の頁数・行数	聖書箇所	主体
1	44.6-14	1Thess. 1,5 1Thess. 5,23	(パウロ)
2	44.23-27	Lk. 19,13f	τοῦ κυρίου φωνήν
3	45.18-46.5	Eph. 4,13-15 Rom. 12,2	ἀπόστολον
4	46.15-26	Lk. 13,24 Mt. 11,12 Mt. 10,22 Lk. 21,19 Heb. 12,1 1Cor. 9,24 2Cor. 6,4	ὁ κύριος ὁ ἀπόστολος
5	47.11-18	Ps. 126,1 Ps. 43,4	(ダビデ)
6	48.5-49.5	Mt. 5,8 Mt. 5,48 Col. 1,28f Ps. 118,80 Ps. 118,6 Ps. 50,12 Ps. 50,13 Ps. 23,3 Ps. 23,4	ὁ κύριος ὁ ἀπόστολος Δαβίδ τῷ πνεῦμα
7	49.11-20	1Cor. 7,34	ὁ ἅγιος ἀπόστολος

動詞	備考
κατὰ τὸν εἰπόντα	* 「……と語る人」となり、パウロが想定されている。
λέγουσαν	κατὰ τοῦ κυρίου φωνὴν τὴν λέγουσαν
なし	* κατὰ τὸν ἀπόστολον * 後接句で λεγων が使われるが、この場合は「意味する」ということ。
ἐγκελεύεται λέγων φησι παρακαλεῖ τρέχειν καὶ ἐγκελεύεται	* ὁ κύριος ἡμῶν ἐγκελεύεται λέγων * 「使徒」については後接句においても動詞が使われる。即ち、後接句において「これを通して走るように呼びかけて……」と続く。
φησι	* 後接句において、τί τοῦτο λέγων と問われるが、この場合も「意味する」ということ。
μακαρίζει λέγων παραγγέλλει παρακαλεῖ τρέχειν λέγων λαλῶν διδάσκει διδάσκει κελεύει φησιν ἐρωτᾷ … ἀποκρίνεται	動詞の最初の二つは「主」について、次は「使徒」、そして次の「教える」は「例によってダビデ」、そして「ダビデを通して御霊が教える」となり、その御霊が「恐れるように呼びかけ」、そしてここからは続いて意味上、主体は御霊のこととして詩編 118 編 6 節は「言う」となり、「問いかけると……と答える」となるが、ここで詩編の引用が四つ連続している。
λέγων ὑπογράφει φησιν λέγων καθαλεύειν κελεύει	* 導入句において「肯定して述べ」として、引用句の中で「言う」とする。 * 後接句において「魂と身体において清めるように述べ、そして一切の罪から最大限速く to 逃れるように命ずる」と続く。

8	50.6-9	1Joh. 3,3 1Cor. 11,1	του ἀποστόλου Ἰωάννου ὁ ἀπόστολος Παῦλος
9	50.19-51.13	Ps. 5,7 Ps. 27,4 Ps. 57,3	ἡ γραφή ὁ κύριος Δαβίδ ὁ θεός
10	51.21-53.3	Mt. 5,16 Lk. 6,26 Ps. 21,26 Ps. 33,3 1Cor.10,3 Joh. 5,44	ὁ κύριος Δαβίδ ὁ μακάριος ἀπόστολος
11	53.3-54.2	1Joh. 3,15 Rom. 1,28-32	του Ἰωάννου ὁ ἀπόστολος

λέγοντος	* ヨハネについては「次のように語る使徒ヨハネに聴こう」(τοῦ ἀποστόλου Ἰωάννου λέγοντος ἤκουσα) と記されて引用。英訳はここは「And I hear the Apostle John saying」とする。 * パウロについては「そして使徒パウロも」とだけで動詞はない。
μισεῖ καὶ βδελύττεται βδελύττεται καταρᾶται βοῶν πρὸς τὸν θεόν φησιν ἐκάλεισεν	* 一つ目の動詞は「聖書」、二つ目は「主」であり、内容が同じ「憎み、嫌悪する」。ここで詩編 5 編 7 節の引用。 * 三つ目と四つ目の動詞(句)は「ダビデ」が主語。ここで詩編 27 編 4 節と 57 編 3 節が引用される。 * 五つ目の動詞は、アオリスト形で、主語は「神」。しかしここでは引用はなされない。引用のないところでアオリスト形が使われている。
λέγει κελεύει εἶπε κελευει, κελευει φησιν λεγω̑ν κελεύει ἐγκαταλέγει φησιν	* 動詞五つは「主」が主体となっており、五番目の λεγω̑ν のみ「ダビデ」(PS. 21,26/Ps33, 3)。 * 七番目は「使徒」となっていて、八番目と九番目はヨハネ福音書に関わり明示されないが内容上「主」が主体と推定される。
λέγοντος ὀνομάζει φησιν	* 8 番と同様「次のように語るヨハネに聴こう」(ἄκουσον τοῦ Ἰωάννου λέγοντος) とあり、第一ヨハネ書 3 章 15 節が引かれる。 * 後接句において「名付ける」が使われる。 * 「使徒」については動詞はなく、引用句のなかで φησιν が使われる。

12	54.5-19	Lk. 16,15 Lk. 14,11 Prov. 16,5 Ps. 18,13f	αὐτός ὁ κύριος ἡ Σοφία τὸ πνεῦμα
13	55.4-13	1Cor. 3,17 Prov. 4,23	ὁ ἀπόστολος
14	56.6-14	Deut. 22,10 Lev. 19,19 Deut. 22,9	ὁ μακάριος Μωυσῆς
15	58.1-23	Lk.18,6-18 Col. 1,28f Eph. 1,15-19 Eph. 1,19f Eph. 3,14-19	ὁ κύριος ὁ ἀπόστολος
16	58.24-60.1	Eph. 1,19f Eph. 3,14-19 1Cor. 12,31-13,3 1Cor. 13,4-8	(パウロ) *ἐν ἑτέρᾳ ἐπιστολῇ

βοᾷ λέγων φησιν διδάσκει	*「叫び語る」のは「主ご自身」、箴言の引用について「言う」と記される。 *三番目の「教える」のところは次のように記されている。αὐτὸ διδάσκει τὸ πνεῦμα τῇ τοῦ Δαβὶδ φωνῇ χρώμενον 「御霊ご自身がダビデの声を用いて教えておられる」。
ἀπειλεῖ … λεγῶν	*「使徒」については動詞は使われていない。 *箴言 4 章 23 節「人よ、あらゆる守りによって汝の心に注意せよ。なぜならそこから生命が出てくるから」について「将軍が兵士に叫び命じるように」と言われている。
φησιν	*後接句で「聖書はこれらの謎によって何を言おうとするのか (βούλεται)」とあるが、この βούλεται も動詞に含めてもよいのかもしれない。 *ここで「聖書」を指して ἀγίῳ と言われている。この語が聖書を指す考えることに無理はなく、英訳でも Scripture となっている。
φησιν φησιν	
φησιν λέγει φησιν ἐπεύχεται διαλέγεται παρακαλῶν φησιν φησιν	*「別の書簡で」は 59 頁 18 行で第一コリント書の前に記されている。 *また第一コリント書 13 章 8 節については繰り返して強調されている。

17	61.7-62.4	Gal. 6,15f 2Cor. 5,17 Eph. 5,27 1Cor. 5,7 1Cor. 5,8	(パウロ)
18	62,1-4	1Cor. 5, 7f	(パウロ)
19	62.7-63.11	Eph. 6,14-16 Eph. 6,17 Eph. 6,18 2Cor. 13,13 1Thess. 5,23	ὁ ἀπόστολος
20	63.16-64.1	Deut. 6,5	なし
21	64.18-65.1	1Cor 11,1 Heb 12.1-2	ὁ ἀπόστολος
22	65.11f	Phil. 3,13	τὸν ἀπόστολον
23	68.1-3	Mk. 9,35	ὁ κύριος
24	71.4-11	Lk. 14,11 Mt. 23,12 Mk. 9,35 Mt 20,28 2Cor. 4,5	ὁ σωτήρ ὁ ἀπόστολος
25	72.2-5	Prov. 2,4-5	ἡ Σοφία
26	73.9-21	Rom. 8,16 2Cor. 10,18 Joh. 5,44	Παύλου ὁ κύριος
27	76.17-19	Gen. 4,4f	なし
28	78.17-21	Sir 24,20 Ps. 4,8 Lk. 17,21	ὁ κύριος

λεγῶν ἐδήλωσεν εἰπῶν ἐκάλεσε	* 後接句において ἐκάλεσε は使われており、これから朗読するのではなく、引用が終わった後となる。
なし	誰とも、「言う」と記さずに引用されている。
κελεύει κελεύων φησιν λέγει λέγοντος ὑπερέχεται	
なし	律法の頂点は何かという問いかけの中での解答として。
εἶπεν	
	κατὰ τὸν ἀπόστολον
βούλεται καὶ παρακαλεῖ λέγων	* この 23 番から第二部 (66 頁 14 行から)
εἶπεν	* καθὼς ὁ σωτὴρ εἶπεν この一句が引用中に挿入。
εἶρηκεν … φησιν	
φησιν	κατὰ τὸ λόγιον Παύλου
φησιν	ὡς αὐτός πού φησιν ὁ κύριος
φησιν	* カインとアベルのエピソードが話題となっている。
εἴρηται	* 御霊を味方にすれば祈りのうちに安らぐよりも、ますます神への愛に燃え立つという行で引用。ルカのみイエスの言葉として。ただし動詞はイエスについてではなく、Sir と Ps については主体がなく、動詞のみ。

29	79.8-13	2Cor. 1,4 Ps. 83,3 Ps. 62,6	(ὁ κύριος)
30	80.4-14	1ThesS. 5,17 Rom. 12,12 Lk. 18,6-7 Eph. 6,8	τοῦ κυρίου ὁ ἀπόστολος
31	86.13-22	Mt. 5,11f Rom. 5,3 2Cor. 12,9f 2Cor. 6,4	ὁ ἀπόστολος
32	88.5-89.6	Mt. 10,42 Mt. 25,40 Mt. 6,2	τοῦ κυρίου

* 聖書引用箇所、引用の一つひとつではなく、引用群としてまとめて 32 箇所と数えた。

* 引用と暗示を分け、暗示と判断されるところについては挙げていない。

* 主体や動詞を挙げるときには、テキストに記されている語形で記載する。ただ φησιν のみは文脈上の異動があるので一律でアクセントを付けずに記載している。

φησιν	*引用されているのはパウロ書簡や詩編であるが、その主体は「主」とされている。「主」については「παρακαλεῖ」という動詞が使われている。
τοῦ παρακαλοῦντος φησιν προτρέπει … λέγων	*最初「呼び出す者」(＝パウロ) に二つ聖句が引かれ、ルカで「主」(τῆς τοῦ κυρίου ἐπαγγελίας, ἐν ᾗ φησι)、続いて「使徒」とされる。
φησιν	
φησιν φησιν	*三つ目の聖句において次のように語る主体が示されている。Ἀκουσον ὁμνύντος αὐτοῦ τοῦ κυρίου